亡き父の心 知るために

広島原爆の日

雨が降りしきる中、原爆死没者慰霊碑に献花する吉岡さん夫妻＝6日午前9時ごろ、広島市

吉岡さん（松山）夫妻 初めて式典に参加

若い世代に語り継ぐ

「世界中が平和であるよう孫にも語り継いでいきたい」―。6日、広島市の平和記念公園で開かれた平和記念式典に、原爆投下の2日後に入り被爆した亡き父をしのび愛媛の遺族代表として初めて出席した吉岡稔さん(66)＝松山市立花6丁目＝と、妻の弥生さん(60)。69年前から続く広島の悲しみを表すような雨が強く降りつける中、平和への思いを強くした。

（1面参照）

「直後やったけんね、放射能だらけの中でしょう」。1945年8月8日、当時21歳だった父徳一さんは、所属していた陸軍の命令で、支援部隊として被爆直後の広島市中心部へ入った。

辺りは手のつけようのない状況で、部隊は10キロほど離れた佐伯町（現廿日市市）へ歩いて移動し、学校の階段の下で小さくなって寝た。喉が渇いて仕方なかったが水はなく、泥水を飲んで耐え、その場で終戦を告げるラジオ放送を聞いた。「そのまま松山に帰ってきた。何もできんありさまだったんでしょう」と父が目にした地獄絵図を思う。

徳一さんが50歳を過ぎたころ被爆手帳を申請し、稔さんは初めて父が被爆した事実を知る。しかし、亡くなるまで、父は体験を語らなかった。稔さんが知る父の被爆体験は、母親にわずかに話していた内容だけ。「思い出したくなかったのかな。被爆に対する差別もあって隠さざるを得なかった人も多かったと聞くし…」

徳一さんは2013年に90歳で亡くなった。父はどんな思いを抱えて生きていたのか―。答えの一端が知りたくて、式典に参加した稔さん。松井一実広島市長が読み上げた平和宣言の「水を下さい」と下級生から懇願された中学生のエピソードに触れ、「雨の中の式典だったから余計に心に響きました」。慰霊碑に手を合わせ「大変な思いをしたね、ご苦労さん」と父を慰めた。

式典を終え、稔さんは「安倍総理も来ていたが、真摯（しんし）に広島のことを思って安易に集団的自衛権行使を進めないでほしい」と願った。

式典を裏方として支えるボランティア、90歳で語り部として活動する他県代表の遺族―。多くの人の思いに触れ、2人は若い世代に思いを引き継いでほしいと、来年修学旅行で広島を訪れる孫にも今日のことを話すつもりだ。（中田佐知子）

(C) 愛媛新聞社 無断転載、複製及び頒布は禁止します。